

アマゾン・林冠部調査計画

～アマゾンのテッペンを目指して～

41 代 OB 木村幸司

隊員構成：木村幸司（隊長 / 41 代）、田中彰（副隊長 / 38 代）

坂井厚思（43 代）、入江努（大阪芸大探検部）

期間：2000年9月20日～12月20日

遠征地：ブラジル連邦共和国・アマゾナス州

目的：1. INPA(国立アマゾン研究所) の若手研究者への技術指導

2. INPA 研究者ニーロ・ヒグチ氏との技術提供を通じた合同調査

3. 林冠部での動植物の映像記録の獲得

4. 動植物の分布図を含む「3次元的植生地図」の作成



早いものでマダガスカル遠征から、ちょうど10年が経った。当時は「林冠部」という言葉は全く耳慣れず、ましてや「熱帯雨林で木登り」などと言っても誰も理解できなかった。しかし、今では熱帯雨林の研究者たちは、あの手この手で林冠部へアクセスし、中には果敢にロープを使って林冠部に挑む研究者もいる。むしろそのことが当然のことになってきている。「本気で熱帯林の研究をするなら、木登りができなければ話にならない」と言う研究者もいる。これは研究の世界だけにとどまらない。インターネットで「ツリークライミング」と検索すれば4万件以上もヒットする。その中身は、レジャーとしての木登りから、エコツアーの一環としての木登り、そしてセラピー的な効果を狙った木登りまで多種多様である。私たちが木登りを始めた10年前から考えると、信じられないことである。こうした中で私たちは間違いなく「木登りのパイオニア」であったし、探検部の活動としても新たな方向性を示した稀有な存在であったと自負できる。

アマゾン・林冠部調査計画は、マダガスカル遠征のメンバーであった田中、木村により構想が始まった。そして新入部員の坂井を迎え、大阪芸術大学探検部の入江が加わることで両大学探検部の合同遠征隊計画として活動を開始することになった。マダガスカル遠征で試行錯誤した技術を飛躍的にレベルアップさせ、さらなる活動の展開を目指したのがアマゾン遠征であった。

しかし、マダガスカル遠征が「大学探検部の可能性を広げた遠征」であったとするならば、アマゾン遠征は「大学探検部の活動の限界を感じた遠征」であった



樹上 TENT を組み立てる。軽量化を果たし、より取り扱いやすくなった。

ともいえる。それは研究分野に関する専門性の欠如であったり、大学生という4年間の期限付きの中での活動という時間的な制約の問題であったりと理由は様々である。分かり易く言えば、「木に登って何をするの?」という根本的な点に対して、私たちは明確な答えを出すことができなかったのだ。そのため、本遠征隊は木登り技術屋から脱することができず、ジレンマを抱えたまま遠征を終えることとなった。

そうは言ったものの、アマゾン遠征隊が集大成として作り上げた「木登り方法論」は、探検部の枠を超えた非常に価値のあるものだと自信をもって言える。これだけ木登りが盛んに行われるようになった現在においても、私たちが完成させた方法論は、昨今の木登り技術と比べて

も全く見劣りするものではない。むしろ、未だに私たちの技術は最先端のレベルにあるといえる。これは間違いなく「私たちだからこそできたこと」だ。それを可能にしたのが、OBでありながら遠征隊に加わり、技術面、新装備の開発などで手腕を発揮した田中の活躍である。そして坂井が何度も何度も行った繰り返し練習により、机上の方法論は実践的な技術へと変わった。入江の奇抜な発想は、新たな方法論開発のきっかけとなり、彼の丹念な撮影とスケッチにより私たちの方法論を図入りの冊子の形にすることができた。こうして完成した「関大式木登りマニュアル」は多くの人の手に渡り、実践された。大学卒業後も私と入江はボル

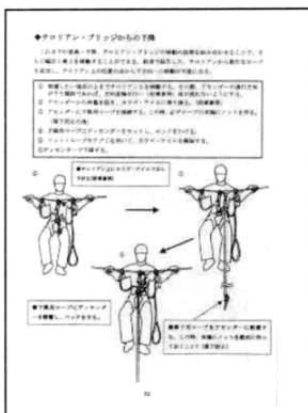
ネオ島に渡り、オランウータンの研究者に技術指導を行った。これらの活動により、自分たちの遠征の意義を再確認できたのだ。

今の、そしてこれからの探検部員たちは私たちの時代以上に、その存在意義を問われ、活動の目標設定が難しくなってくると思う。単なるアウトドアサークルになってしまわないためには、探検部の活動に社会的な視点を入れることが重要になってくる。しかし個人的には、そうした視点があることはベターではあるけれど、絶対ではないと思う。なぜなら、「探検部」という名前に惹かれて入部した者たちは（私がそうだったように）、ただ単純に未知の世界を求めて、ドキドキ、

ワクワクするような体験を求めていたのだけなのだろうから。考えるよりも、まず行動を。そうすれば、新たな道が開けてくるのだと思う。

最後になりましたが、アマゾン遠征計画を実施するに当たり、大学関係者、探検部OBをはじめとして、本当に多くの方々のお力添えを頂きました。この場を借りて厚くお礼を申し上げます。

41代主将 木村幸司



木村たちが集大成として編集した「関大式木登りマニュアル」の一部。絵や文言は全てオリジナル。A4版107ページに及ぶ

下記は2001年6月15日号の関大通信に寄せた、アマゾン遠征のレポート抜粋です。

アマゾン探検記

私たちが目指したのはアマゾンの巨木の頂点、「林冠部」と呼ばれる地上50mの未知の世界だ。林冠部には

熱帯雨林の多くの生き物たちが集い、生活する。そこは地球に残された最後の秘境であるといっても過言ではない。私たちは3年間に渡るトレーニングと事前準備の末に、ようやく憧れのアマゾンの熱帯雨林に足を踏み入れることができた。果てしなく続く樹冠の地平線、そこに吸い込まれるように沈んでゆく夕日、巨木の上で出会った不思議な生き物たち。それらはアマゾンの巨木の頂点に立った私たちだけが目にすることができた貴重な世界だ。アマゾンの林冠部は私たちの期待を裏切ることのない、夢あふれる、感動の空間であった。

さあ、出発

2000年10月、私たちはアマゾンの熱帯雨林へ向かう飛行機の中だった。40時間以上の飛行機の旅を経て、私たちが降り立ったのは地球の裏側、ブラジルの地方都市マナウスだ。飛行機を降りた瞬間に、体にまとわりつくようなジメジメと湿った空気が私たちを歓迎してくれた。

「あちいー、何じゃこの暑さは!!」「これは、暑すぎるでえ」と隊員の口から出る言葉が、熱帯の苛酷な環境を分かりやすく表現していた。空港に着くなり、すぐにジュースを買って一気に飲み干した。飲んだすぐ後には、ダラダラと汗が流れ、再びジュースに手を伸ばす。－言葉、文化、人種、気候－そのどれをとっても日本とは全くかけ離れた地球の裏側から私たちの探検は始まった。

いざ、熱帯雨林へ

現地での関係者訪問や協力機関との打ち合わせ、装備の通関手続きなどを済ませた後、ようやく熱帯雨林へ出発する日

が訪れた。私たちのカウンターパートとなったのはINPAという世界的に有名な研究所であった。INPAの研究員とともにランドクルーザーに溢れんばかりに探検装備を積み込み、遠征地に出発した。

とうとう念願のアマゾンの熱帯雨林に足を踏み入れる。森の内部は薄暗くひっそりとしている。時折、遠くから猿の群れが鳴き叫んでいる声が聞こえる。不気味で恐ろしい気配さえ感じる。湿度が異常に高く、ジメジメしていて乾いている地面はどこにもない。汗でネトネトになった首回りや背中に、無数の蚊やブヨなどの害虫が不快な羽音を立てながら群がってきた。憧れのアマゾンの熱帯雨林は、決して私たちを歓迎している様子ではなかった。



アマゾンの熱帯林の樹高は 50m に及ぶ。迫力満点の樹上生活

もしも皆さんが熱帯雨林に初めて入ったなら、必ず「あれっ？」と思うに違いない。きっと熱帯雨林やジャングルと聞けば、このようなイメージを持っているだろう。「うっそうと植物が生い茂り、毒蛇や危険な肉食獣がうようよしている。そして、不思議な昆虫や鳥、色とりどりの美しい花。生き物の楽園。」だが、実際にジャングルに入ってみると動植物の姿をほとんど見つけられないことに驚くはずだ。地面はひっそりと薄暗く、藪もなく非常に歩きやすい。危険な毒蛇もいなければ、美しい花もない。見つけられるのはカビやキノコなどの菌類か、シダ植物ばかりで、動いているものといえばアリくらいだ。生き物の気配すら感じる事ができない。それでは、生き物や植物は一体どこにいるのだろうか？

熱帯雨林では、木々の葉や枝が幾層にも重なり合い太陽の光を遮っている。そのため、地面に届く太陽光は全体の1%以下となり、生物が生息するのに適した環境ではない。一般に想像する「生命の豊かなジャングル」は地面とは別の場所にある。その場所こそ私たちが目指した「林冠部」という地上数十mの木の上なのだ。

まだ、一般には「林冠部」という言葉は浸透していないが、実はこの特殊な空間が近年、世界中の熱帯雨林研究者の間で非常に注目されている。熱帯雨林の樹木は、太陽光を十分に受ける頂上部分(林冠部)で花を咲かせ、実をつける。それを求めて昆虫や鳥、猿などの多種多様な生き物が林冠部に集う。彼らの大半は一生を樹上で過ごす。つまり林冠部こそが生命の宝庫と呼ぶにふさわしい世界なのだ。

林冠部が注目され始めたのは十数年前。以来、研究者たちは現在に至るまでに様々な方法で林冠部へのアプローチを試みてきた。森の中に巨大なタワーを組んだり、ビル建築に用いる巨大なクレーンを運び込んだり、飛行船を用いて林冠部にアクセスする方法まで開発された。しかし、それらは数百万円～数千万円以上の経費を必要とし、自然環境へ与える影響も少なくない。そこで私たちはこれまでに培ってきた探検の技術を応用して、簡単に低コストで林冠部調査を可能にする方法の開発に取り組んできた。洞窟探検や登山の技術を応用し、ロープを用いて木に登るという新しい方法を作り上げた。独自に考案、開発した装備をと組み合わせることで樹上に長期間滞在することを可能にしたこの方法は、研究者からも高い評価を受けた。称して「関大式木登り術」。この方法でアマゾンの熱帯雨林に挑戦したのだった。



国立アマゾン研究所へ、研究技術としての方法論指導を行った

アマゾンのテッペンを目指す

さあ、ようやく本番!! 私たちが目指したのはアマゾンのテッペンだった。そこは誰も行ったことも見たこともない未知の世界。地上50m!! 頭上に広がる世界は一体どんな表情を私たちに見せてくれるのだろうか?

一時期、「アマゾンはずべて解明された」と言われていたが、今では「アマゾンのことは何一つ解明されていない。調査のたびに何かが発見される」と言われている。それは林冠部に研究者たちの視線が向いてからのことだ。未だに新種の哺乳類さえ発見されている。こんな未知の世界だからこそ、私たちの存在意義がある。木の上で見ること、聞くこと、感じること、その全てが「発見」であり、私たちにしか知ることのできない貴重なものだ。ただ単純に誰も知らない世界に足を踏み入れ、未知の世界をのぞくことこそが、私たちの探検だ。

サウナの中にいるようなジメジメとした蒸し暑さ。アマゾンの頂点を目指し、必死にロープを手繰り寄せてゆっくりと巨木を登ってゆく。体中からガラガラと流れ出る汗が目に入る。耳元では蚊、アブ、ブヨなどの不快な虫がプーンという腹立たしい羽音を立てながら私たちを迎える。汗をぬぐい、耳元の害虫を振り払いながらどんどん上を目指す。登れど登れどテッペンは近づかない。上を見上げるたびにがっくりする。途中、何度も休憩をはさまなければ、登りきることができない。休憩をして上を見上げるたびに「ここはアマゾンなんだな」と改めて実感し、「よくもまあ遙々と地球の裏側まで来てこんなことをやっているものだ

な」と我ながら感心した。地面を見下ろすと、下で順番待ちをしている隊員たちが小さく見える。すでに30m程の高さまできていた。日本で十分なトレーニングを積んだ成果か、全く恐怖を感じない。高い場所に慣れてしまっただけで恐怖感覚もマヒしてしまっているようだ。

恐怖よりも、その先にどんな世界があるのか? という期待と好奇心で胸が膨らむ。初めて木に登った時のことを思い出す。最初は体中がガタガタと震えて、枝にしがみついたまま身動きひとつとれなかった。そんな頃が懐かしく思える。「木の上で生活できたらおもしろいなあ」冗談混じりで話していたが、今では本当に木の上で生活できるようになってしまった。食事やトイレまで木の上でやってしまうのだ。―「木登りにかけた青春」―何も知らない人が聞けば危ない人間だと思われるかもしれない。でも、そんな青春もわるくないかなと思いながらさらに上を目指す。そんなことを考えながら登っているうちに頂上が見えてきた。

秘密兵器は一本梯子

頂上付近に到達した所で、テッペンへのアプローチの準備をはじめ。樹木の一番上の部分は枝が細く折れやすいのでロープをかけて登ることはできない。だが、今回は「一本梯子」という秘密兵器があった。梯子をうまく組むことによって枝の無い木のテッペンを目指し、森を見下ろすことのできる位置まで到達するのが狙いだ。日本でのトレーニングでは実験を重ねていたものの、熱帯雨林での使用はもちろん初めてである。これまでに努力して作り上げた技術が本当に熱帯雨林で通用するのか? 不安で一杯になり

ながらも、まだ誰も見たことの無い世界への興味に興奮した。頭上にはいろんな生き物がいるようで、鳥の鳴き声や羽音が盛んに聞こえる。あこがれ続けたアマゾンのテッペンもうすぐ上だ。一体、この頭上にはどんな世界が広がっているのか？どんな生き物が待っているのか？とにかく楽しみで、これまでに無いほど胸が高鳴った。



林冠から頭を出すと光があたり、景色が開ける。そこは生き物の最前線だ

テッペンに立った!!

四人がかりで梯子を組み上げて安全を確認した後に、ようやく最後のアプローチを開始する。フラフラとゆれる不安定な梯子を恐る恐る登ってゆく。木々の細枝や葉っぱ、そしてつる植物などが幾重にも重なり合い、私たちの行く手を遮る。それらを必死に掻き分けてゆく。上を覗きあげた瞬間に、突然ギラギラとした強い光が顔にあたり、目がくらんだ。ゆっくりと目を開くと、周りには地面とは比べ物にならないほど明るく、太陽の光で満ち溢れ、鮮やかな緑色をした木々の葉が隙間無くびっしりと広がっている。

「テッペンに出た!!」 それまでのジメジメとした空気が一変じてカラッと乾燥した心地よい空気変わった。薄暗い地面が嘘のように、まぶしい太陽の光で満ち溢れている。そして心地よい風がスーッと辺りを吹き抜ける。本当に熱帯雨林かと疑うほどの快適な空気。上を見上げると真っ青な空が広がる。自分たちの上にはもう空しかない!! とうとうアマゾンのテッペンに立ったのだ。

周囲を見渡せば、眼下には一面に緑の

樹海が延々と広がる。終わりが無いのでは？と思えるほど緑のじゅうたんが続く。地平線なんてものは見当たらない。そこには林冠部で作られた「樹平線」が360度の一大パノラマで広がっていた。隊員の口から出るのは「うわぁー」「すげー」「うっへー」と歓喜の奇声ばかりで言葉になっていない。それほど感動的な光景であった。

自分たちのすぐ横では、TVや図鑑でしか見たことのないハチドリや不思議な昆虫が乱舞している。手の届くところに花が咲いている。さらにそこに集まる昆虫が花粉を運ぶ様子まではっきりと見える。ここで見るもの全てが私たちだけの世界だ。そして、これこそが私たちの目指した探検だ。アマゾンの樹上50mの世界。そこは生き物たちの楽園であり、どんな形容も足りぬほどすばらしい、夢の世界、未知の世界であった。

(41代OB)